

## 夏の空に思うこと

伊藤 千夏

僕が初めて君の絵を見たのは、学校で失敗した日だった。進路希望調査に書いた僕の将来について担任の先生と話していたら「お前には厳しいからもっと考えろ」と言われて腹が立って喧嘩をし、反省文を何十枚も書かされ、さらには朝の天気予報を見ていなかったせいで家に帰っている途中に雨が降ってきて全身ずぶ濡れ。とにかくついてない日だな、と改めて感じた。

県の中でそれなりに有名な中学校に入った僕は三年経ち、高校をどこにするか考える時期がやってきた。特技もない、趣味も皆無と言っても過言ではない僕は、当然志望校を選ぶのに時間がかかる。現に、クラスで決まっていない人は僕を含めて残り三名だけだ。焦らない訳がない。一日中考えこんで、僕は特進クラスがある高校の中で有名なところを三校選んで提出した。そして放課後となった時に先

程のような事が起こり、一体自分が何の為に勉強しているのかまで考えてしまうようになった。

家に帰ると先に帰ってきていた妹に「お兄ちゃん、大丈夫？」と心配される辺り、余程ひどい顔をしていたらしい。ただただ呆然としながらタオルで全身についた雨水を拭き取り、風呂に入ってからすぐに寝て、その日は終わった。

次の日、いろいろあった前日に加えて夕飯を食べていなかったせいでいつもより早くに目が覚めた。担任の先生とあまり会いたくないと思いつつも義務教育中の自分は学校に行かなければならない。その時はその時かとためいきをつき、家を後にする。

玄関の扉を開けて外へ出ると冷気を感じた。涼しい空気の中を歩く。日中になると蒸し暑い空気が押し寄せてくるが、陽がまだそんなに昇っていないせいかそ

んなことはなかった。湿気を含んだあの空間で授業を受けるのかと考えると苦笑してしまふ。学校に向かいながら朝焼けを見ている僕は何故だか気分が良かった。

いつもより大分早く来たせいか、自分の教室には誰も人がいなかった。教室に足を踏み入れ、自分の席にある椅子に座る。いつもならなんてことないのに、そわそわしている。数分しか経っていないはずなのに何時間も経っている気がするのは、静かすぎる空間にいるせいだろうか。なんとなくなく教室にいることが辛くなり、適当に学校を探索することに。朝、家を出る時に抱えている期待を胸にどこかへと向かった。まるで何かに引きつけられるように、ゆっくりゆっくり。

自分が所属している美術部の部室にまで来た。部員ではある僕だが、受験に向かって頑張らなくてはならないので最近顔を出していない。電気が点いているので久々に顔を出してみようと決意する。扉は横にスライドさせるタイプのもので、かなり年季が入っている。窪んでいる部分に手を添えて右側にスライドさせた。

部室の真ん中にはキャンバスがある。

人は誰もいないみたいだ。キャンバスの絵がこちら側から見えない位置にある。

興味がわいてきた。描いた人に失礼だと思いつつも見てみたいという好奇心の方が勝ってしまった。ちよつと見るぐらいなら差し支えないだろうと思ひ、キャンバスの絵を見てみると思を飲んだ。一番最初に目についてはオレンジ色を含んだ赤色だった。オレンジ色というには濃くて、赤色というには何かが違う。様々な色を重ねて作り上げたであろうその色はとても印象的で美しい。黄色みを含んだこの色は、確か茜色というのだったか。

そんな色を背景にした駅のホームに少女と少女が長椅子に座っている絵だった。上手い。綺麗。そんなありきたりな言葉しか思ひ浮かばなかった。完成している絵だと思われるこの絵は、どこか物足りなさを感じた。何が足りないのだろうか。

そうして考えているとゴトリと何かが落ちた音がした。扉の方から聞こえてきたので、音のした方を見ると女の人が立っていた。足元にペットボトルがあるので、それを落とした時に鳴った音が今さ

っきの音か、と一人で頭の中で納得する。

「えつと・・・」

「その絵は完成していません」

「えっ？」

「その絵は完成できていません。ところで、先輩は何の用事ですか。人探しですか？」少女は淡々と話す。呆気に取られている自分とは大違いである。

「いや、部室に久々に顔を出そうと思つて」敬語を使わなかったのは後輩だと分かったからだ。学年ごとにスリッパの色が違つていて、僕の学年は紺色、二年生は赤色、一年生は黒色と決まつている。彼女のスリッパの色は赤色だったので僕より一つ年下ということになる。目の前にいる彼女もそれを分かつていて『先輩』と呼んでいるのであろう。

「そうですか・・・何か描きますか？」そう言つて彼女は僕に椅子を渡してくれた。ありがとう、と一言お礼を言つてから座る。油絵だと時間がかかつてしまふし、イラストは画材を用意するのに面倒である。残る選択肢は水彩画と鉛筆画の二通りである。

「・・・鉛筆画にしようかな。時間も用意

もそんなにかからないし」

「画材を持って来ますね」

彼女は腰を下ろしていた椅子から立ち上がった。が、僕は手で制して座らせた。

「いいよいよ。用意は自分でするから」何から何まで用意してもらうのは他人任せな気がして嫌だ。自分の事は自分ですべきだと思う。用意といつても画用紙と鉛筆、消しゴムにティッシュぐらいだ。ものの数分で用意した道具を使つて描き始める。さて、上手く描けるかなと考えていると、

「先輩は空が好きですか？」

と唐突に彼女が言った。

「・・・僕は好きだな」

鉛筆をスラスラと動かしながら答える。久しぶりに鉛筆を握つたなあ。

「空はいろんな顔を見せてくれる。明かりをより明るく照らしてくれる暗い空も、  
『夏』だと感じさせてくれる空も」

目の前で僕の話の聞いているであろう彼女にホラ、と言つて、描いた絵を見せる。

「・・・スカイライトスカイ」

「正解。僕の一番好きな空なんだ。グラデーションもだけど、何よりもこの空が

見れる時間帯が好きだな」

「スカイライトスカイツ、確か夕暮れ時にしか見れない空ですよね？」

「そう、一日に一回しか見れない空。どんな空よりも短い時間でしか見られないから好きなんだ」

ちよつと語りすぎたかな、と一言つぶやくと聞こえたらしく、クスリと笑った。

「先輩は空が大好きなんですね」

「・・・語ってしまいう程にね」

「気にしないでくださいよ。墓穴を掘り返さなくても大丈夫ですよ」

「・・・面目ない」

「いえ」

それからは沈黙しかなかった。だが、嫌な感じではなく、むしろとても居心地の良い場所であった。

そんな沈黙を破ったのは、

「私は空が嫌いです」

彼女だった。

「空が私を見下しているような気持ちにさせるんです」

あくまでもそんな気がするだけなんですけどね、と付け足す彼女に僕は言う。

「そういう考えをする君みたいな人もい

れば、僕みたいな考え方をする人もいるさ」

朝のSHRまで、残り五分を知らせるチャイムが鳴る。結構な時間を彼女と話すことに使っていたらしい。

「・・・そろそろ戻ろうか」

「・・・はい」

そうして僕等は、一緒にいた部屋から離れるのだった。名残惜しさを感じたのは気のせいだろうか。気のせいではなければ、その理由は空が綺麗だからということにしよう。それから、彼女と学校の中で会うことなく終わった。

帰りの電車の中で使い慣れた手つきで音楽プレイヤーを聞くのであった。ふと今まで聞かなかった曲名に目をつけた。今日だけで何度使ったか分からない『空』という単語が使われた曲である。『空模様』と表示されているこの曲は、以前友達に教えてもらいながらも聴いていなかった曲だ。音楽好きの友達と言う曲だし、

と思い、聴いてみることにした。

『僕の教室から見える景色はモノクロだ』そんなフレーズから始まる曲。ギターでしか弾かれていないバラード曲で物語風

に歌われている。一発で好きになった。

どうやらこの曲は、とある少年と少女の恋を空を使って表現して作られたものらしい。少女と言われると、朝の彼女を思い出す。そういうえば、彼女の名前を知らない。何という名前なんだろうか。・・・いやいや、なんで彼女のことを思い浮かべるのだ。おかしいだろう、と自問自答している曲が終わった。三分五十三秒という短い時間なのに印象強い曲であった。

目的地である駅に着き、電車から降りる。改札をくぐり抜けると、駅の近くに

あるCDショップに目を向ける。今まであまり気にしたことがなかった店が、この曲をたいそう気に入ったらしくCDだけでも買うことにした。また今度、その友達にすすめる曲を聞いてみることにしよう

と密かに楽しみを覚える。

店内に入り、目的のCDを探す。一番手前にある棚から順番に探し始める。「あ」行から始まり、「か」行にやつと入る。「そ」はどこだ、と探すと、やつと見つかった。残り一枚となっているCDを見て、とても人気であることが分かる。ギリギリセ

「フ、と思いつながらCDに手を伸ばすと誰かとぶつかってしまった。」

「あ、すみません。」

「いえ、こちらこそすみません」

「あれ、君って・・・」

「あ、先輩」

ぶつかった相手は、電車の中で考えていた彼女だった。

「その曲、好きなの？」

「あ、はい。最近気になり始めて・・・先輩がどうぞ」

そう言って、CDを手渡される。

「いや、音楽プレイヤーには入ってるし、君が買いなよ」

「え、でも・・・」

「気になってるなら買いなよ、それ。すごく良い曲だから気に入るよ」

絶対に、と付け加えると、「ありがとうございます」とお札を言って買いに行つた。僕は買いに行つた彼女をちらっと見る。たったちよつとの間でこんな話せたり会えたりするとは、と自分に驚いてしまう。

「さて、と」

用事もないし帰ろうかな、と思ひ帰ろう

とすると「先輩」と呼び止められた。

「？」

「あの、ありがとうございます」

軽く頭を下げられる。そんなに凄いことをしたわけでもないが、「いえいえ」と返しておく。

「先輩のおかげでこの曲をもっと好きになれそうです」

それでは、と去って行く彼女に一瞬気を取られたが右手を軽く左右に振る。誉め言葉を貰つてしまい、ちよつとだけ照れてしまう。

「・・・明日、あの子に名前を聞いてみよう」

決意したことを口に出しながら家路に着く。明日のことを思い浮かべながら笑う。

ああ、明日が楽しみだ。ドアノブに手をかけて開ける。

「ただいま」

次の日、前日と同じくらいに起きて朝一番に窓を開けて外を見る。夜の青に朝日が少しずつ混ざっていく様子を眺める。

「・・・空はやつぱり好きだ」

この広い空の中で僕はぼつりとつぶやいた。さて、学校に行く準備をしよう。